

「今までは信心を獲得したと思つて喜んでいましたが、あなたのお説教を聞いて崩れてしまったがどうしたらよいのでしょうか」と泣いてきた。

「崩れたのは結構ですよ、できあがつていたから崩れたのです。捏ね上げて造りあげていたからくずれたのです。崩れないのはりっぱな信心ではありません。信仰が崩れるまで円熟していかないからです。誰もかれもが私は宿善が厚いから素直に聞いたと自惚れているのだから善人ですよ。口で私たちのような悪人をお助けといっているのは痛くもなければ痒くもない話ですから、ありがたくもない嬉しくもない、死んだらお助けですから寝言をつてるようなものです。だれでも雑行雑修自力の心を起こしたことはないのだから、正行専修他力もなんにも知らないのですから 崩れるはずがないのです。いよいよこれこれと安心していたから崩れたのですからめでたいのですよ。これまでは合点していたのですから、これからは実地の求道となつて親子が一体になるのだからこんなめでたいことはありません。今までは道綽禪師はこうおっしゃった、善導大師はこうおっしゃった、聖人さまは私の身代わりだと、の話を聞いて喜んでいたのですが、自分はどうかと実地問題になつたから話は逃げて素地が出てきたのです。

私のことを、大沼は他人の信仰を崩して廻るといいますが、私が信前信後の水際を説き、方便と真実との真仮の分際を説いて聞かすと、腫物に触るようにならざるに素直な真似をしていた信仰はこつぱに崩れるのです。

自分の思いぶりや聞きぶりが間に合う間はみな自力の計らいがあるので、その計らいがご教化に調子を合せているだけですから機法合体です。その機法合体が離れるから淋しくて崩れるのです。

これからが実地の求道となるのだから真剣になるのです。一度信仰が崩れたら、今まではごに調子を合せて喜んでいたの

だから、自分の実機は何にも聞いていないことに気が付くのです。三毒五欲の煩惱は噴き上げる、こうまでも馬鹿ではなかつたがと、あせれば焦るほど自己の無能が知らされて、真剣になればなるほど地獄とも極楽とも思わぬ闡提の機が照らし出され、何一つとして取柄のない心が見せつけられ、聞いたもつたもじたも、それは感情が合点しただけで、自性はびくとも動いていないことに驚いて、狂気のごとく求道すればするほど仏さまに遠ざかってゆく機が見え、これを教える知識はいないか、これを導く大徳はいないかと知識を探せば一人もいないことに驚き、いま自分が空曠の沢、の境をさま迷っていることに気が付くのです。

自分の心の三毒五欲の煩惱は、十劫の昔に助かっているというような昔話ではなくて、いま現に刻々とどん底に沈みつつある、逆謗の屍が自分ではないか。素直に聞いていると思っていたのは自惚れの土天井で、難化の三機、難治の三病はわたしではないか、三世の諸仏が呆れて逃げたのも、恒沙の薩埵が身震いをして愛想をつかしたのも、素直なものと自惚れていたわたしではないか。聞いたもつたもえたも、道理も理屈もこの話であって、私の地金は平気でいるではないか。今までは、私の本性を抜きにして、法ばかり眺めて喜んでいたのでから無帰命安心ではないか、心の底は何にも聞いていないのだから無安心ではないか。自分の心には一分一厘微塵ばかりも真実らしいものはないではないか、この機がどこで救われるのだ、この機はいつ救われるのだと詮じつめてみれば、地獄とも極楽とも思わない、まだ死なないよと平気でいる機が憎らしい。何とかならないか何とかかならないかと泣く涙までもなくなつたときが、調熟の光明で照らし出された私の真実の機、絶対の悪性であったと往生の望みの綱が切れたときと、我能く汝をらんのが貫いたときは同時であって、機の真実（嘘が真実）と法の真実（真実が真実）とが一体に融けあうたときが、仏凡一体、一体になつたときである

これを、極悪最下の機を極善最上の法で撰取すると法然上人は仰せられたのです。徹底するまで必死で求道しなければ、徹底した他力不思議の信仰は諦得できません。無常の風は一息じゃ、ぐずぐずしては十年経つても開発しませんよ」といつ

ておいた。

泣きなき嫁の前に手をついて「今までは信心をいただいたつもりで、死んだらお助けおたすけと喜んでいましたが、ご院家の話を聞いたなら、いま開發して助からないものが死んだ先で助かるものか、因果が矛盾しているではないかといわれて信仰が崩れてしまったのです。聞き抜くまでわたしを参らしてください」と頼んだら、「はいはいはないのですからお参りください」と嫁は言ったが、嫁の心の中では、何十年も聞いて喜んでいたものが崩れるとは何を聞いていたのだろう、私は一度聞いたらずぐに素直に聞けたのにとったそうなの。

真宗の道俗は、みなこの程度の信仰だから崩れる人はいません。まだまだ円熟して大丈夫と喜んでいる人でなければ崩れません、崩れる人はしあわせです。この世で開發することができからめでたいことです。崩れないと威張っている人は無量永劫、包んでいる機が流転するのです。

そのころ、わたしは朝六時から百日説教していた。説教が終わると、竹本さんの宅へ行って夕方かえる、こういうことを毎日繰返していたが、ある日疋田さんは大慶喜をして帰った。嫁の前に手をついて「忙しかったるうに、よく出してくれた。信仰も、死んだ先でなくてこの動きも取れない私が正客であった。身も心も南無阿弥陀仏で、これからおいをしますよ」とにこにこして働いていましたが、五か月後、で動けなくなつた。動ける間に早く聞かなければ、こんな難病になれば聞かれないぞとの仏さまのご催促であったかと泣いて喜んだ。二度法話にいったが拜んで喜んでいた。葬式がすんで、嫁がお礼に参り「叔母が見舞いに来ているとき、病人に食事を運んだら、「私がお仕をするからあなたは台所が忙しかろうから行きなさい」と叔母がいうので、私は「お願いします」といったが、悪口どもいうのではないかと襖の外で静かに聞いていると、「姉さん、誰が先に死ぬるかわからないが、あなたは大病になったのだから先としなければならぬから、形見分けはどんなにしたらよいか、私に言っておきなさい」そらきた、それを言いたい為私を追い出したのだと思つて必死で聞いていると、母は有難

いありがたいとお念仏をしながら「内の嫁ほどありがたい嫁はいない。息子にはすぎた嫁じゃ。子供が多いのに私の口に合うものを作り、汚いものまで世話をして、不足の顔をちよつとも見せないが、私は心の中で菩薩ぼさつと拜んでいる。私は分けはにもやらない、みんな嫁にやる。嫁は一人占めをするような根性の悪い嫁ではない。私が、死んだ先まで世話をやかなくても嫁はちゃんとしてくれる」といってお念仏を称えておられるさ、わーと大声を出して泣きそうになったから台所まで走ってゆきましたが、私の腹の中は、病気が長引いたら自分の身が持てまいと思うあさましい心、死んだ方が本人も楽であろうにとう心、こんな鬼であるのに、母は私を菩薩と拜んでいるとは、なんとした尊い心でございましょうか。あの辛い病気の中でも一度も不足をいわれたことがなかったのは、信仰の力でございましょう。私も信仰に入らしていただきますと、泣いて話していた。

【原稿集】 二十三頁

私は八幡市の方で六月十九日から九月の彼岸会まで朝の講演をして、御仏様より預かる門徒衆の雑行雑修の草をつたり、自力疑心の小石を掘ったりしていますが、同行が真剣に求めて下さる姿を見ますと涙ぐましくなるようであります。

その中、疋田夫人が熱心に求道され、

御院家さん、今まで私は何を聞いていたのでございましょうか、唯々死にさえすれば五十二段、花降る浄土の真ん中で、尽きせぬ楽しみをさして戴くとばかり眺めていましたが、自分の心の善し悪しの自力に狂わされていることも知らず、これよいかしらという不安が疑いであることも知らないで平気でおりましたが、誰にも打ち明けられないこの心が晴れて満足のできる時がありましたでしょうか。

有りますとも 名号六字は光明無量に寿命無量ですから、光明無量の届いたのを願では信と言ひ、成就では信心と述べ、聖人様は信樂開發の時刻の極促を頭しと教えられ、曇鸞様は衆生一切の無明の闇を晴らしと宣うたのであり、寿命無量の届

いたのを願では楽と言ひ、成就では歡喜と述べ、聖人様は廣大難思の慶心と教えられ、曇鸞様は衆生一切の志願を満足せしめ給うと宣うたのでありますから、晴れて満足が出来なかつたら撰取されたとは申されません。大千世界に満ちた火を分けても聞かねばならぬ大法を居睡りで片付けようとは無理な話ではありませんか、身命を賭してお求めなさいよ。

その後涙ぐましい程熱心に求道され大満足を得られたが、間もなく肝臓で病床に臥し、葬式の後に四十余りの嫁さんはお礼に来られて次のような懺悔話をされました。

御院家様、信仰程尊いものは有りません、私も母のように大満足さして戴く迄求めさして戴きます、永年聞いて慶んでいた母が、どうも心の曇りが去らないと言つて、毎朝毎朝参詣し講演が終わつても同行の家に行つて聞かして貰つたと言つては昏過ぎでなければ帰られないので、口にこそ出さないけれども、どれだけ不足に思つたか知れませんでした。と言つた処で孫の守は一寸もしてくれずに、遊び歩いて家に迷惑掛けていて何が信仰かと思つていましたが、大満足された或る日、私の前に両手をついて、永の夏中、孫の守もさせずよく参らしておくれた、不足も言わず、不満も抱かず心置きなく参らして下さつたお蔭で仕合せの身にさして戴きました。さあこれから働きますよ、と挨拶された時、尊い母のお言葉に物が言えませんでした。母は私の主人を育てておいでなさるのに、孫の世話までさせようとするのが私の不心得でございました。

その後まもなくあの恐ろしい肝臓病、半年ばかり臥せられないで坐つたばかりでありますのに、一口半口小言の出た事がありませんでした。あれでも私のいない時に、親族の者にどんな事を言われるかも知れないと、襖の外で立ち聞きをいたしました。すると親族の者や同行に向かつて「私程仕合せ者はおりません、こんな病気になる前に信仰の解決がついていなければならぬ、どんなに迷ひ狂うかもしれませんのに、病苦に攻めらるればめらるる地獄の責苦をさしてき、今に今娑婆永劫の苦を捨てて親様の里に帰らして戴くと思えば称えずにはおられません。これも偏に嫁のお蔭でございます。嫁は私の為にはよい善知識でございませぬ、一度だつて嫌な顔をした事が有りませぬ、食事から看護から総ての事に気を配りますので勿体なくて拜まずにはお

られません」と物語らるるのを、自分の悪口でも言わるるのではないかと立ち聞きしている私の心に反して気高いみ様のおと聞くと、五寸釘を打たるるよりもうございました。

と話しておられました、信仰は死後の問題のみでなく、自分の醜い心が逆謗の屍である事が、はつきり照らし出されて、今が三定死の境地に立っている事を見せつけられ、願力不思議に摂取された時を平生業成とも即得往生とも不退転とも不体失往生とも言うのでありまして、今の一大事を抜きにしては死後の一大事は有られないのです。何卒、恨み多いこの人世に、呪い多いこの地上に信念の微笑をもつて一切に感謝しつつ合掌の日暮をさして戴くように、今から明るい信仰に生き上がらなければなりません。